

奈良県・私立西大和学園中学校

多彩な体験で育む グローバル・リーダーの素養

2014年度、文部科学省は高校支援の新事業として「スーパーグローバルハイスクール(SGH)(*1)」を始めた。国際的に活躍するグローバル・リーダーの育成を目指し、深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等を身に付ける教育活動を重点的に行う56校が指定された。そうした高校に生徒を送り出す中学校では、グローバル・リーダーの卵を育てるために何が出来るのだろうか。

School Data



西大和学園中学校

◎ 1988(昭和63)年開校。校訓は「探究、誠実、気迫」。高校は2002年度から10年以上にわたるSSH(*1)の指定を受け、2014年度にはSGHの指定も受ける。2014年度に女子中等部を設置。校長 上村佳永先生 / 生徒数 656人 / 学級数 15学級 / 所在地 〒636-0082 奈良県河合町薬井295 / TEL 0745-73-6565
URL <http://www.nishiyamato.ed.jp/>

「未来の飛行機のカタチ」「フィボナッチ数列とその性質」「カメムシの日本における必要性」「日本語の(景色)を表す言葉」「かんでんダイエット」「勉強とコーヒー」——これらは、西大和学園中学校の3年生が取り組んだ卒業研究のテーマだ。同校では2年生3学期から1年間を掛けて実験や調査をし、1万語程度の論文にまとめるという活動を二十数年前から行っている。

テーマは自由。2年生3学期にKJ法やマインドマップを用いて自分の関心を掘り下げ、疑問に思うことをテーマにする。教員かOBの大学生がTAに付いて助言をするが、生徒が自力で研究するのが基本だ。優秀な研究は卒業式当日、保護者の前で発表する(写真1)。学外のコンクールで受賞するほどの研究もある。一方、3年生の7月になってもテーマが決まらない生徒や、

実験をしても失敗ばかりで、答えがなかなか見付からない生徒もいる。しかし、「それでもいいんです」と上村佳永(よしの)学園長は言う。「答えのないことに挑戦するのが大学の研究ですし、社会に出たら自分で課題を見つけ解決する力が求められます。疑問に思うことを解明するという挑戦をし、テーマに深く入り込む。そういう経験をとことんさせて、テストに出ることしか勉強しようとしないうちの生徒の発想を、まだ頭が柔らかい中学生のうちにガツンと変えたいのです」

体験が興味を外へ外へと広げていく

西大和学園中学校は、開校以来、「科学的洞察力、国際性、利他の精神」といったリーダーとして不可欠な資質を育むことを教育目標にしている。きめ細かい教科指導による学力向上だけでなく、多彩な行事を盛り込み、幅広い教養と人間性を育む。生徒に行事の運営を任せて主体性を育むと共に、生徒が得意分野を生かしてそれぞれに活躍し、互いを認める機会になることもねらいとする。

中学校では、特に体験学習に力を入れる。1年生はファームステイ(3日間)、2年生は富士登山(2日間)、3年生はアメリカ語学研修旅行(12日間)が中心だ。他にホタルの観察、天体観測、外国人観光客への通訳体験など、学年団が生徒の状況に

*1 SSHはスーパーサイエンスハイスクールの略称。将来の国際的な科学技術人材の育成を目指し、理数系教育に重点を置いた研究開発を行う高校を文部科学省が指定



西大和学園中学校・高校 学園長

上村佳永

かみむら・よしひさ 「先生方の意欲を形にし、子どもの可能性を徹底的に追求し、挑戦する学校運営を心掛けている」



西大和学園中学校・高校 教頭

曾我雅俊

そが・まさとし 「みんなを引っ張るリーダーだけでなく、この人でなければと言われるリーダーも育てたい」



西大和学園中学校・高校

丸谷貴紀

まるたに・たかき 国際教育部主任。英語科担当。「失敗は成功への練習。失敗を恐れず挑戦する生徒を育てたい」



上/写真1 卒業式当日の研究発表会では5組が発表。保護者からの鋭い質問もあるという



右/写真2 「ヤングアメリカンズ」は、アメリカ人50人と3日間、歌とダンスのワークショップを行うプログラム。生徒の家庭でホームステイの受け入れも行う

じて企画する。曾我雅俊教頭はこう語る。

「感性が豊かな中学時代にどんどん外に出て、自分とは違う文化や生活、未知の世界を体験し、衝撃を受け、自分を見つめ直し、新たな発見の場になればと考えます」

企業と連携した課題解決型学習を取り入れるのも、そのためだ。2年生では、キャリア教育の1つとして、「コーポレートアクセスコース」を実施。クレディセゾンや大和ハウス工業などの企業から提示される「若者の『あったらいいな』を実現し、お金がぐるぐる回り出す『永久不減ビジネス』を展開せよ!」といった課題の解決策を、グループで考え、中学生ならではの提案をするという活動だ。働くことの意義や経済活動への理解を深め、社会に目を向けるきっかけとなっている。

失敗OK!とにかく英語を使おう!

英語教育は、グローバル人材にとって必須のコミュニケーションツールとして使えるように指導を工夫する。低学年では、英語への抵抗感をなくすためにとにかく使わせるようにしている。国際教育部主任の丸谷貴紀先生は、指導のポイントをこう話す。

「英語が対話の道具であることを肌で感じられるよう、聞く、話す、書く、読む場面を学校生活の中で出来るだけ多く設けています。英語が文法的に違っていたり、発音が変わったりしても、失敗を恥ずかしながら発言しなくならないようにするため、あえて何も言いません。ネイティブの先生にもその点は徹底してもらっています」

1年生では英語圏では一般的なPhonics(*2)を行い、まず耳から英語に慣れさせる。そして、各行事の感想文を英語で書く。単語のスペルや文法が間違っている、添削はしない。思いが伝わればOKというスタンスだ。文法の授業もあるが、教え過ぎると生徒は文法を意識し過ぎてしまうため、そのバランスに気を配っているという。2・3年生では洋書の多読を週1回行う。単語が数個という絵本に始まり、Oxford Reading Treeシリーズなどにレベルを上げていき、年間で約10万語は読むという。知らない単語が出てきても、辞書は使わず

読み飛ばす。長文読解の時に分からない単語が出てきても、文意を推測することが自然と出来るようになるという。

ネイティブの講師7人は終日常駐。廊下や食堂でも生徒に気軽に話し掛け、行事にも参加する。生徒が自然と英語を話す機会が生まれ、その積み重ねによって英語が日常的なものになると考えるからだ。

このような英語教育に転換して5年が経つが、3年生でのアメリカ語学研修旅行では、生徒に劇的な変化が現れた。

「ホストファミリーから『以前は話し掛けても答えが単語で返ってくるだけ』と嘆かれていましたが、今では『生徒から積極的に話し掛けてくれ楽しい』と聞いています。外国人相手でも気後れせず、英語を話せるようになっていたのです」(曾我教頭)

本学園の高校はSGHの指定を受け、高校1年生がアジアを訪れ、企業や大学の協力を得て、貧困など現地の課題に取り組むフィールドワークを計画している。進学後、それらの活動に主体的に取り組むためにも、中学段階からの意識涵養と英語力育成が欠かせないと、上村学園長は強調する。

「中学校での意識涵養が、高校での経験に結び付き、更に大学での研究、社会での飛躍へとつながると考えます。本校での経験を糧に、日本人らしく世界で活躍する人材に育ってくれればと期待しています」

*2 発音と文字の関係性を学ぶ音声学習法。英語圏の子どもや外国人に英語の読み方を教える方法として用いられている